

鹿市医郷壇

地



兼題「気温」(はだもつ)

526 樋口 一風 選

天

氣温が土瓶を出させた月見焼酎
(唱) 芋ん肴で満月つ祭つ

(評) 田舎では、十五夜の夜は、白の上に、唐芋や里芋、すすき、栗など飾つて十五夜さあに供えるものでした。飲兵衛親父は、言わざもがな、黒じよかで爛とした焼酎で、「良か晩な」と月見焼酎です。

焼酎は、コップでなくて。黒じよかが秋からは最高です。「土瓶を出させた」に良か気温つ感じます。

えたもの。萩も咲きはじめて、いよいよ秋である。

薩摩狂句曆 三條風雲児著 から
捨せ犬番地も知たじ戻つ来つ 比良 純垂

よく「犬は三日飼えば、三年忘れないが、猫は三年飼つても、三日で恩を忘れる」と聞くものだった。愛猫家からは叱られるかも知れないが、結局、犬の利口さを言つたものであろうと思う。

大事にされて、土を踏ませてもらえない犬も可哀想だが、すぐ飽きて、世話をしなかつたり、拳句の果ては捨てられる犬も少なくない。野犬が子供を襲つた例もあるから怖い話。

ところで、捨てられた犬が、家の番地も知らないのに帰つて来たのは、哀れな話である。

朝顔が小もなつきたや秋が来つ 織田 兵岳

こぼれた種子が芽を吹いた朝顔であるが、庭の隅か垣根あたりに生えていて、夏からずつと花をつけつづけて来たのだろう。もちろん鉢植えにするような高級種もあるまいし、豪華な花が咲くわけでもあるまいが、結局目を楽しませてくれたのである。その花が、涼しくなるにつれて、だんだん小さい花になつてきたところをとら

五客一席

朝昼の気温の差で精が切れつ
(唱) 朝はす一すで昼やまだ真夏

盆過ぎも暑き気温で苛されつ
(唱) 日中あ猛暑夜は熱帶夜

気温が良ち湯治養生で湯疲れしつ
(唱) 良か按排じやち長湯が間違

ぎやすい秋になり湯治でも行く気になりました。(原句には「出養生」とあります)。

「湯疲れしつ」ですから、湯治だろうと思ひます。

季節も良くて、ゆつたりとした気分になり、つい長湯をして湯疲れしたという句です。紅葉の頃の露天風呂は、「なんちゅあならん」でしょう。

「湯疲れしつ」ですから、湯治だろうと思ひます。

暑かつた夏も過ぎ、ようやく凌

ました。(原句には「出養生」とあります)。

「湯疲れしつ」ですから、湯治だろうと思ひます。

暑かつた夏も過ぎ、ようやく凌

ました。(原句には「出養生」とあります)。